様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０２６５

研究課題名（和文）歴史叙述にみるエスニシティの研究：ヘレニズム・ローマ期イオーニアー地方を中心に

研究課題名（英文）Ethnicities in Hellenistic and Roman Historiography in the Ionian area

研究代表者
佐藤　昇（Sato, Noboru）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：５０５４８６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：１、古典期のミーレートスは、大ポリスアテーナイとの関係を良好にするため、イオーニアー植民の神話を自ら、アテーナイとの外交上巧みに利用し、周辺他国との差異化にも利用していた。２、これに対して、同じくイオーニアー人意識を共有していたアテーナイは、前五世紀に帝国化する中、自ら「土地生え抜き神話」を生み出したが、知識人はこれに戸惑いを覚えていた。（３）ヘレニズム期、ミーレートスは、イオーニアー人意識よりもむしろ、神域ディデュマをめぐる古い神話、アポッローンの神話などを新たに語り始める。周辺諸都市と競合しつつ、ヘレニズム諸王の好意を得るため、神域ディデュマが外交上有効な文化資本だったためだと考えられる。

研究成果の概要（英文）：1. The Milesians in the Classical period made use of 'Ionian migration mythes' on their own initiative in order to establish good relationship with Athens, the most powerful city-state, and to differentiate themselves from the other Ionians. 2. While the Athenians in the fifth century also shared 'Ionian' identity, they gradually developed the 'autochthonous' myth and identity as their imperialistic leanings intensified. However, the contemporary intellectuals in Athens seem to have been perplexed by this newly developed myth and identity. 3. In the Hellenistic period, the Milesians began to promote the mythes on Apollo and those concerning the Minoan period, rather than 'Ionian migration mythes'. Since the oracular sanctuary at Didyma, which was rebuilt at the beginning of the Hellenistic period, became important 'cultural capital', the Milesians made use of the mythes related to Didyma in order to win favour of Hellenistic kings and to be superior to other cities around Miletus.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：歴史叙述　神話　ミーレートス　ディデュマ　アテーナイ　イオーニアー　アウトクトン　ヘレニズム

１．研究開始当初の背景

ネイション、エスニシティをめぐる問題群は、この数十年、歴史学、社会学研究者にとって中心的関心事であり続けている。古代ギリシア史でも、殊に 90 年代後半以降、Hellenicity(ギリシア的性格、ギリシア性)やエスニシティをめぐる研究が盛んとなった。これらの研究は、画一的な「ギリシア人意識」の存在に疑問を投げかけ、「バルバロイ」に対置される「ギリシア人」意識が、とりわけ前 5 世紀、ペルシア戦争以降に構築されたものであること、前古典期にはイオーニアー人、ドーリス人といったエスニック集団への帰属意識（エスニシティ）が強く保持されていたことを主張し、「古代ギリシア」像の修正を迫っている。

こうした古代ギリシアのエスニシティ研究は、これまで前古典期から古典期、とりわけアテーナイがエーゲ海域の覇権を握る前 5 世紀までを主たる考察対象としている。いわば「古典的ギリシア Classical Greece」の形成期と完成期を考察することで、古典的 Hellenicity の普遍性、不変性に重大な疑義を呈したと言えよう。それでは、これとは逆に、前 4 世紀以降、ヘレニズム時代を経て、ローマ帝政期に至るまで、古代ギリシア人の Hellenicity は、いかなる途を辿ったのだろうか。あるいは、前古典期までにエスニシティの中核にあったとされる種々のエスニシティは、消え去ってしまったのか。消え去らず、継承され、変化していったのか。そうした継続と変化には、地域ごとにいかなる差異があったのか。こうした問題に十分な解答を与えるような研究は、国内にはもちろんなく、欧米でも部分的に着手されつつある状態であった。

上記の問いに応える一つの手がかりを与えてくれるのが、歴史叙述である。前 4 世紀からヘレニズム時代にかけて、数多くの歴史家がギリシア世界に現れ、史書を残した。その多くは断片として残されているに過ぎないが、多様な情報を含み、歴史家断片集成 *Brill's New Jacoby* の編纂をはじめとして、近年、改めてその史料的重要性が注目されるようになってきていた。これら歴史叙述は、先行する史書やその他の史料に拠る「史料的根拠に裏付けられた」記述もある一方、同時代の人々が語る噂、神話伝承の類いまでもが含まれる。こうした「歴史」叙述は、言うまでもなく「文化的記憶 Cultural Memory」に属するものである。とりわけ、ポリスの建国神話など、共同体全体に関わる「歴史」の叙述は、葬送演説など、公開の場でくり返し語られ、伝承されながら、同時に、時代ごとに移り変わる人々の関心、問題意識、政治状況に応じて、変容し、改変されてもいく。こうした共同体全体をめぐる（現代人からは「神話」とも受け取れる）「歴史」叙述の有り様を、通時的に追跡調査することにより、エスニシティに関しても、時代を通じて継続される側面と変容していく様子が確認できる筈である。こうした歴史家断片、ヘレニズム時代の歴史叙述研究に対する関心が欧米の研究者の間で高まってきており、研究代表者自身もこれに参画していたことも、本研究を新たに着手した背景となっている。

２．研究の目的

本研究は、古代ギリシアのポリスに関する、建国神話をはじめとした「歴史」叙述に注目し、叙述の内容、叙述のされ方、叙述される「場」などを分析することで、エスニシティの通時的変容、エスニック集団内部におけるエスニシティの共有と揺らぎのメカニズムを解明することにある。

3 年間で一定の成果を収めるため、対象地域は主に小アジア、イオーニアー地方のギリシア都市、中でもミーレートスを中心的に扱うこととし、時代はヘレニズム・ローマ期に焦点を合わせることとする。イオーニアー地方は、ギリシア世界と東方世界が交錯する、政治・文化的要衝であり、ヘレニズム・ローマ時代にもその重要性をいっそう増している。中でもミーレートスは、前古典期、古典期に当該地域の中核的ギリシア都市として活躍しながら、前 4 世紀には長くペルシアの支配を受けることとなり、さらにその後、改めてギリシア都市として、ヘレニズム王朝の支配圏に組み込まれるに至った。こうした政治、文化的に劇的な変化を被った都市において、とりわけギリシア世界に復帰したヘレニズム時代に、いかなる歴史叙述が生まれ、そこにいかなるエスニシティ意識が反映しているのか、いかなる歴史的状況がそれらに影響を及ぼしているのか、検討していくことを目的とする。

合わせて、前古典期・古典期のアテーナイをはじめとする古代ギリシア都市、同時代の近隣都市の歴史叙述、エスニシティと比較検討を行い、ヘレニズム期のイオーニアー地方の特殊性、歴史性を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

（1）ヘレニズム期、ローマ帝政前期に成立、流布したと考えられるミーレートスに関する神話叙述、歴史叙述を網羅的に検討する。この作業を通じて、ミーレートスの神話叙述、歴史叙述の変化、エスニシティ意識の継続・変容について検討を加える。

史料に関しては、碑文集成（*Inschriften von*

Milet; Didyma. 2. Die Inschriften）から上述の時期の碑文を選択して用いるとともに、及び歴史家断片集成（*Brill's New Jacoby*） に見られる関連の記述を主たる検討材料とする。
（２）同時期のイオーニアー地方および周辺地域に位置するギリシア諸都市について、同じように分析を加え、比較検討するとともに、エスニシティの共有と揺らぎ、都市間の競合や相互の影響関係について考察を加える。
史料は同じく、上述の歴史家断片集成を用いる他、それぞれの地域ごとにまとめられた碑文集を利用する。
（３）歴史家断片に加えて、ヘーロドトス、トゥーキューディデースといった歴史作品も主たる史料に加え、前古典期、古典期までのミーレートス及びその他の諸都市（とりわけミーレートスとの関係も深く、史料・先行研究も豊富な古典期アテーナイ）の神話叙述、歴史叙述、エスニシティのあり方と比較検討し、エスニシティの変容と当該期の意義について考察を加える。

４．研究成果

（１）古典期ミーレートスの歴史叙述とイオーニアー・エスニシティについて
まずは、古典期（前 5 世紀）、アケメネス朝による支配及びペルシア戦争を経験する中で、ミーレートスは大ポリスアテーナイとの関係を強めていく。こうした中、戦中から戦後にかけて、ミーレートスは「イオーニアー人」のエスニシティを強調し、イーニアー人建国神話を強く打ち出すようになる。とりわけ「アテーナイから出立したイオーニアー人植民者」であることをたびたび主張し、アテーナイとの外交関係構築に利用するとともに、他のイオーニアー諸都市との差別化も図ろうとしていたことが確認できた。
　この点に関しては、従来、アテーナイ側の帝国政策という側面ばかりが注目されてきたが、小国ミーレートス側の積極姿勢、彼らが置かれた環境に力点を置いた説明を加えることで、これまでの国内外の研究に対して新たな視点を付け加えることができた。

（２）古典期アテーナイにおける土地生え抜き神話とイオーニアー・エスニシティ
前 5 世紀前半、アテーナイは、大国ペルシアとの大戦を乗り越え、エーゲ海域における勢力を一挙に拡大し、帝国化していくが、そうした中で、同国には、他都市とのエスニックな関係を拒絶するような、土地生え抜き（アウトクトン）の神話（アテーナイ人は古来土地生え抜きの民であるとする神話）が流行するようになる。しかし、ミーレートスをはじめとする諸都市と外交関係を結ぶ中、アテーナイもまたイオーニアー人という植民者集団の末裔であるという神話、エスニシティもまた強調されざるを得なかった。同時代の史料を精査することにより、当時のアテーナイに暮らした人々、少なくとも知識人たちは、こうした相容れないエスニシティ、歴史叙述の共存に対して、当惑を覚え、新しく流布した「土地生え抜き神話」に対して慎重な姿勢を持っていたことも確認できた。これは、同時代のアテーナイ（知識）人が、複数のエスニシティ、歴史叙述が流布する状況を、いかに捉えていたのか、同時代人の視点から分析したという点で、これまでの研究に見られなかった新たな側面を指摘している。

（３）ヘレニズム期ミーレートスの神話叙述、エスニシティ利用の変化
古典期の後半、前 380 年代から前 330 年代にかけて、ミーレートスをはじめとする小アジア沿岸部の諸都市は、再びアケメネス朝の支配下に収められた。やがてヘレニズム期（前 4 世紀末～前 1 世紀）、小アジアにおける権力構造が、アケメネス朝支配から、ギリシア・マケドニア系の諸王朝の支配へと大きく移り変わる。こうした中、アポッローンの神託で知られたディデュマの神域を復活させたミーレートスは、アポッローンや、同じく神託で有名な神域デルフォイとの深い関係を想起させる建国神話、ディデュマの起源を古くミノア時代にまで遡らせるような神話を繰り返し語り始めるようになる。これらは、新たな支配者との良好な関係を築くために、「文化資本」であるディデュマおよび関連の神話を、外交上利用していたことに影響を受けたものと考えられる。ヘレニズム王たちによる保護や投資と、これを期待する諸都市間の競合も、そうした神話、歴史の変化に影響を与えたものと推察される。周辺都市の歴史叙述、神話叙述もまた同様に、「文化資本」として外交に利用されており、近隣都市、神域の伝承が相互に影響を与え、競合（エミュレーション）しあっている様子が確認できた。
　興味深いことに、ミーレートスにおいて古典期までに顕著に見られたイオーニアー植民神話、イオーニアー・エスイシティに関しては、碑文や歴史家断片などから確認できる限り、上記に述べたアポッローンやミノア系の神話に比べると、この時期の政治、外交、文化活動の中であまり大きな役割を担っていなかった可能性が考えられる。無論、これらが消え去ったわけではないことは、イオーニアー諸都市の連合体が継続して、少なくとも宗教的機能を担っていたことからも確認できる。また、ローマ帝政期に入ると、改めてイオーニアー・エスニシティーを盛んに利用し、これによって伝統と格式のあるポリスを自認するようになることが、碑文などから明らかにされた。しかし、ヘレニズム期の状況を伝える、現存する同時代史料からは、ミーレートスが、少なくとも、イオーニアー・エスニシティ以外の要素を強く持った神話、歴史叙述を、「文化資本」として積極的に利用していたことは、間違い無いだろう。これ

は当時の国際情勢が要請したものと考えるべきである。

以上、こうした分析・考察は、これまでの先行研究において指摘されたことはなく、小アジア沿岸部のヘレニズム世界に生じた歴史叙述、神話叙述、エスニシティの変化について新しい視点を提供することができた。とりわけ、「文化資本」と神話・歴史叙述の関わり、神話・歴史叙述をめぐるエミュレーションという視点は、他地域、他の時代を考える際にも適用できる、有効な視角であると考えられる。なお、ヘレニズム時代のミーレートスに関する包括的な成果は、国際学会において口頭報告を行ったものに含まれており、雑誌論文として発表する予定である。

今後、さらに周辺地域の神話叙述、歴史叙述の変化や相互関係に注目した研究を継続して続け、ギリシア人のエスニシティ、歴史意識がヘレニズム時代特有のダイナミズムの中で、いかに変化していったのか、構造的な理解につながるような研究を展開していくことになるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 佐藤　昇、シンポジウム「プルータルコスと指導者像」：松原報告へのコメント『西洋古典学研究』、査読有、64 号、2016、114-116 頁

② Sato, Noboru, Out-of-Court Settlement and Public Opinion in Democratic Athens, *KODAI*, 査読有、Vol. 16、2015、pp. 43-56.

③ 佐藤　昇、書評「『西洋古典叢書 デモステネス弁論集』第 1-4 巻」、『クリオ』、査読なし、29 号、2015、73-86 頁、

〔学会発表〕（計１１件）

① Sato, Noboru, Hellenistic Didyma and the Milesian mythical past, Asia Minor Workshop、2016.3.20、Kyoto University (Kyoto)

② 佐藤　昇、前４世紀アテーナイの法廷と修辞、2015 年度西洋史研究会大会、2015.11.15、立教大学（東京都）

③ 佐藤　昇、古典期アテーナイの養子縁組：家産と社会への影響に関する一考察、古代ギリシア文化研究所 2015 年度年次総会・研究会、2015.11.14、東京大学（東京都）

④ 佐藤　昇、シンポジウム「プルータルコスと指導者像」：松原報告へのコメント、日本西洋古典学会第 66 回大会、2015.6.6、首都大学東京（東京）

⑤ Sato, Noboru, The Athenian adoption and the adoptee's paternal household, International Conference: Aspects of family law in the ancient world, 2015.4.23, London, (UK)

⑥ Sato, Noboru, Hellenistic Didyma and the Milesian mythical past, The Third Euro-Japanese Colloquium in Ancient Mediterranean World, 2014.4.25, Athens, (Greece)

⑦ Sato, Noboru, Comments on Douglas Cairns's "Revenge, Punishment, and Justice in Athenian Homicide Law." the Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History, 2013.10.20, Beijing (China)

⑧ Sato, Noboru, Milesian Myths and Didyma, the Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History, 2013.10.19, Beijing, (China)

⑨ 佐藤　昇、古典期アテーナイの法廷と社会、神戸大学史学研究会総会、2013.7.13、神戸大学（兵庫県）

⑩ 佐藤　昇、日本における古代ギリシア史研究の現在、日本西洋史学会第 63 回大会、2013.5.12、京都大学（京都府）

⑪ Sato, Noboru, Abusing legal procedures for impeding legal procedure, International Conference: Use and Abuse of Law in Athenian Courts, 2013.4.17, London (UK)

〔図書〕（計３件）

① Nick Fisher, Hans van Wees, Noboru Sato, et al., Classical Press of Wales (Swansea), *'Aristocracy' in Antiquity: Redefining Greek and Roman Elites Edited*, 2015, 390 (203-226)

② 近藤　和彦（編）、佐藤　昇　他、山川出版社、『ヨーロッパ史講義』、2015、243（9－31）

③ 本村　凌二（編著）、佐藤　昇　他、講談社、『ローマ帝国と地中海文明を歩く』、2013、418（299－316）

〔その他〕
講演翻訳

① アタナシオス・リザキス著、佐藤　昇訳、解説、「ローマ世界の周縁で社会的階梯を

上下する」、『クリオ』29 号、2015、59-72 頁。

② デボラ・ボーデカー著、佐藤　昇訳、解説、「歴史家と／としての初期ギリシアの詩人」、『クリオ』28 号、2014、86-103 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　昇（SATO, NOBORU）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：50548667

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：